

現代社会学の展開

一回顧と展望

ハーバード大学名誉教授

タルコット・パーソンズ

中野秀一郎 訳

去る10月20日、関西学院の招きで来校された社会学界の権威ハーバード大学名誉教授のタルコット・パーソンズ博士は、来学早々の同月25日、社会学部主催の講演会において、社会学部2号教室(チャペル)に溢れんばかりに集った聴衆を前に表記のテーマで最初の公開講演を行なわれた。周知のとおり、パーソンズ博士は、戦後世界の社会学界にその精緻な理論展開によって多大なる影響を与えた人であり、その学説は、賛否はともかくとして、広く社会科学の各領域で注目を集めたのである。博士の学問的関心は、当初経済学に始まるのであるが、その後、哲学、社会学、心理学、文化人類学、政治学など幅広い分野にその研究をおし進め、主として「人間行為の理論」を中心に、体系的な社会(学)理論の構築に成功、今もって日々新しいアイディアの追求に貧欲ともいえる程の情熱を燃やし続けている学究である。今回の講演もまたこうした博士の基本的発想をうかがい知る上で、きわめて貴重な示唆に富むものであった。ここに、その講演内容を訳出し、読者の便宜に供するしだいである。

この度私に与えられましたテーマは、「現代社会学の展開」というものであります。もちろん、これは歴史的なアプローチというものを示唆しております。ところで、私としましてはこの際若干の“逸脱”を試みてみたいと思うのです。すなわち、ここではこのテーマを社会学における理論的枠組の展開というように解釈して問題を考えてみようと思うのです。もちろん、社会学にはこれ以外にもいろいろのことが語られなければならない、実証的な調査の手續きのことや、その外こうした種類の問題は山のようにありますし、それらはいくまでもなくきわめて大切なものであります。

さて、理論的枠組について考えるといたしましても、私はこれを社会学という学問領域よりもやや広いものとして考えてゆきたいのですが、これは私のみならず多くの他の学者もそういう言葉を使っているわけですから、いわゆる英語で「Action」(行為)と呼んでいるものを考察の対象としたいと思うわけです。われわれは「行為」の一般理論というものについて語りますが、これは人間レベルにおける象徴的過程であり、それのみというわけではありませんが、なかならず言語によって媒介されているものであります。そして、この中に、社会的相互作用によって生起する社会

体系が存在するわけですが、これはその一部を構成するに過ぎません。社会体系の境界領域については、ふたつの問題に関して述べておきたいのですが、ひとつは、行為者としての人間個人の問題であり、この分野は通常心理学的問題の領域であると考えられております。もうひとつは、文化的枠組の問題であり、その中で、そしてそれに支えられて社会体系が機能するのであります。それは、歴史的な伝統や宗教的信念体系、科学的知識の体系など、その外さまざまなものを含んでいるのであります。そして最後に社会体系そのものの内部の問題でありますけれども、ここには、私見によれば、次のような未解決の問題が存在すると思われれます。すなわち、社会学がもう二つの社会科学、経済学と政治学とにどのように関係づけられなければならないかという問題がそれであります。

さて、こうした背景のもとに考えますに、社会学もまた私が「行為」と呼ぶものの他の部分と同様、第一義的には、西欧世界の文化的発展の所産であります。思うに、その最初の出発点は18世紀の西ヨーロッパで成熟する啓蒙主義の文化の中に見い出さるべきものであると考えます。その長い複雑な歴史の中には、ヒューム (David Hume, 1711-1776) の名で代表されるようなイギリス経

驗論の哲学的運動や、ヘーゲル (Georg Wilhelm Friedrich Hegel, 1770–1831) に収斂するドイツ観念論の系譜、さらには、観念論者というよりはむしろ、私の考えでは前二者の調停者としてのカント (Immanuel Kant, 1724–1804) などが存在したのであります。これは総じて合理主義運動の一局面を現わすものであります。もっともこれに対する対抗運動——すなわちロマン主義運動——もなかったわけではなく、この潮流の最も主要な創始者としては、ルソー (Jean-Jacques Rousseau, 1712–78) の名を忘れることはできません。しかし、いずれにしろ、社会学の文化的出自を探求するべきは、まさにこの潮流の中に於てであるわけでありす。

ところで、この啓蒙主義の文化的枠組の中で、特に卓越した一連の思潮は経済問題を取り扱ったそれであり、この点はルイ・デュモン (Louis Dumont, 現代フランスの文化人類学者)——もっともその本は最近のもので未だ日本ではよく知られてはいないと思いますが——が近著¹⁾で分析し、これを「経済イデオロギーの勝利」というふうと呼んでおります。特にかれの強調しました点は、この流れには相対立する二つの考え方があるが、しかしそれとて、より広いパースペクティブから見れば、同一の流れの一部分であると申しております。このふたつの考え方は19世紀初頭の英国における古典経済学より生れ出たものであります。その源泉はいうまでもなく18世紀のアダム・スミス (Adam Smith, 1723–90) に遡ることができるものであり、19世紀を通じて非常に重要な運動として展開し、19世紀中葉に至って一つの反対勢力、すなわち社会主義イデオロギーによって攻撃されることになるわけですけれども、そのもっとも主要な知的展開がマルクス主義として結実するわけでありす。御承知のように、マルクス (Karl Heinrich Marx, 1818–83) の『共産党宣言』は1848年に出版されております。

社会学が成長してくる知的状況は、いわゆるルイ・デュモンが「経済イデオロギー」と呼んだものの二重のジレンマと無関係ではありません。ひとつは、このイデオロギー内部のふたつの異った

考え方、すなわち個人主義的、社会主義者たちが「資本主義的」と呼んだものと、社会主義的なそれ、主としてマルクス主義の形をとるもの、との間の葛藤であります。しかし、もうひとつは、この経済イデオロギー内部の特殊な葛藤を越えて、このイデオロギーと当時展開し始めていた社会の構造一過程で経済的説明からはとり残されていたものとの間の対立でありました。そして、私の考えでは、こうした反作用はふたつの国で顕著に現われたと思われす。すなわち、ひとつはフランスにおいて、もうひとつはドイツにおいてであります。そして留意すべきは、産業革命の発祥の地ではあったが、経済理論以外の理論の展開ではその中心的な地位を占めることのなかったイギリスでは、それが存在しなかったという点であります。フランスでもドイツでも、この潮流を語る場合に、若干の先覚者達とそれに続いて19世紀末から20世紀初頭にかけて現われる統合者を指摘することが可能であります。

たまたま、この関西学院大学はキリスト教の宣教師たちによって創設されたと聞いておりますので、キリスト教の伝統に模したアナロジーを用いることは必ずしも不適切ではないと思うのですけれども、キリスト教のたとえで申しますと、先覚者たちというのは預言者ヨハネの役割を果し、同様に統合者は救世主キリストに模して考えることができると思うのです。もちろん、社会学者になんらかの宗教的な性格をもたせようとするつもりは毛頭ないわけでありまして、これはまったくのたとえ、アナロジーに過ぎません。さて、フランスの場合、預言者ヨハネの役割を演じたのはなかんずく次の三人、すなわち、サン・シモン (Saint-Simon, 1760–1825)、オーギュスト・コント (Auguste Comte, 1798–1857)、それにアレクシス・ドゥ・トクヴィル (Alexis de Tocqueville, 1805–59) であります。もちろん、かれらはすべて今日の意味では社会学者ではなく、むしろ社会解釈の諸問題に深く係わった哲学的知識人とでもいべきひとたちであります。ドイツでは、同様な役割を演じたのは、いささか複雑な構成を示すヘーゲル学派のひとつと (もちろん、ヘーゲル自身もそ

1) Louis Dumont, *From Mandeville to Marx: the Genesis and Triumph of the Economic Ideology*, Univ. of Chicago Press, 1977.

の一人であります), それにフォイエルバッハ (Ludwig Andreas Feuerbach 1804-72) やマルクスなどポスト・ヘーゲリアンのひとびとでありました。中でも特に重要な人物はフェルディナンド・テンニエス (Ferdinand Tönnies, 1855-1936) であり, その有名な著書『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』²⁾は1887年, すなわちマルクスの没後すぐに出版されており, それがマルクスの影響を強く受けているという点がすこぶる重要なことなのであります。

こうした二重の背景のもとに, 二人の統合者がほとんど同時代人として, フランスとドイツに現われるのでありますが, それはいうまでもなくエミール・デュルケム (Émile Durkheim, 1858-1917) とマックス・ヴェーバー (Max Weber, 1864-1920) であります。かれらは, 一見, きわめて相異っているようにみえます。私の仕事を批判するひとの中には, かれらの間には共通点よりもむしろ差異の方が大きいというものもいるのですけれども, 私はかれらにみられる「収斂」を基本的に重要なものと強く感じております。そして, この事はなによりも, かれらが西欧世界の発展に併って現れた同じ一連の問題に対し, またそこに生じた事柄に関する理論的理解の試みに対して, 同じような反応を示したことと無関係ではありません。それは, 大きくなりつつあった経済的解釈の二重性と、これらの経済的問題がその母胎たるより広い社会の中で連関している諸問題に対する, ある意味ではロマン主義的な反応でありました。そこで, デュルケムの最初の理論的な関心が連帯の問題であったというのは偶然ではありません。しかし, かれはこの問題を経済現象の文脈の中へ置いたのであります。周知のように, かれの最初の大著は社会における分業について書かれたものでありますけれども³⁾, この主題はアダム・スミスや古典派経済学者の第一のテーマでもあったわけでありまして。

思い出していただきたいのでありますけれども, デュルケムは階級闘争を分業の病理的形態として分類し, これを現代社会における正常なものとは見なさず, 従って, 自らをマルクス主義者ではないと申しました。ヴェーバーもまたいわゆるかれが「資本主義」と呼んだもの, 現代の合理的なブルジョワ資本主義の解釈に大きな関心を示しました。しかし, かれもマルクス主義の見解とは異った側面に注意を向けました。すなわち, ひとつは, 「ブルジョワ」(かれもこの言葉を使っているのですが)の献身について, もうひとつは市場の圧力や労働者階級の搾取に基づくのではなく, 価値(観)を基礎とした経済的生産であります。この視点は, マルクス主義のそれとは大きく異なるものであります。さて, デュルケムとヴェーバーは共に, 経済イデオロギーのふたつの流れがなしえなかったこと, すなわち近代社会の経済現象に関して新しいより広い見地を確立することに興味をもっていました。デュルケムの仕事は, この点からみればきわめて驚くべきものであります。かれの書物のタイトルは『宗教生活の原初的諸形態』⁴⁾というものでありますし, それはオーストラリアの原住民の宗教を研究したものであります。これが一体どうして現代社会の分業と関係があるのでしょうか。もちろん, 私は大いに関係があると信じております。デュルケムは, いかなる経済学者ともきわめて異った文脈で, 社会の進化に関する諸問題に関心をもっておりました。そして, この点ではまた, ヴェーバーも同様であります。

思いますに, ヴェーバーの仕事で経済イデオロギーのどちらの流れとも一線を画すもっとも独創的なものは, かれの比較宗教社会学であります。この中の『ヒンドゥー教と仏教』⁵⁾と名付けられた部分で, かれは日本についても触れております。かれは仏教の起源をインドに求めた後, さらに中国, 日本, その他の東アジアの地域に言及してお

2) Ferdinand Tönnies, *Gemeinschaft und Gesellschaft*, 1887. (杉之原寿一訳, 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』岩波書店, 1954年)

3) Émile Durkheim, *De la division du travail social - Étude sur l'organisation des sociétés supérieures*, 1^{re} éd, P. U. F., 1893. (田原音和訳, 『社会分業論』, 青木書店, 1971年)

4) Émile Durkheim, *Les formes élémentaires de la vie religieuse; Le système totémique en Australie*, P. U. F., 1912. (古野清人訳, 『宗教生活の原初形態』, 岩波書店, 1941-42年)

5) Max Weber, *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*, Bd. II, J. C. B. Mohr, 1921. (池田昭他訳, 『アジア宗教の基本的性格』, 勁草書房, 1970年)

ります。もっとも、当時の日本はその後の歴史にみられるように世界の関心を惹くような存在ではありませんでしたので、この点ではかれの貢献は取りたててここで述べる程のものではございません。

さて、デュルケムとヴェーバーは基本的には共に、経済イデオロギーのいずれの流れともきわめて異ったタイプの進化論者であり、その科学的、理論的枠組は特にマルクス主義のそれとは異っておりまして。というのも、マルクス主義派ではいわゆるドイツ語でいう「歴史主義」(Historismus)の伝統が強かったからであります。マルクスがリカード (David Ricardo, 1772-1823) やその他の古典派経済学者から引き継いだ経済理論は、資本主義の理論、わけてもある特殊な経済システムの理論であって、決して経済理論一般ではありませんでした。デュルケムとヴェーバーは、このマルクス主義の歴史主義的性格に強く反旗をひるがえしたわけでありまして。そして、マルクスの理論の展開はそれを大部分ヘーゲルに負っているのです。もっとも、かれ自身が申しているように、「ヘーゲルを逆立ちさせて」、すなわち「観念論的」な解釈にかえて「唯物論的」なものを基礎に置いたわけでありまして。しかし、歴史主義的な思潮は当時のドイツの社会科学で隆盛をきわめておりました。ドイツ人として、ヴェーバーはこれに対して鋭く反撥いたしました。そして社会科学、文化科学、自然科学の全領域に亘つて一般化された理論的概念化を主張したのであります。もちろん、この考え方はデュルケムの共有するところでもありました。従って、この二者に共通するひとつの主要な特徴はまさにこの点にあったと申すことができるのでありましょう。

現代社会に至る過程で展開した経済発展の性格に関するこうした見解に加えて、この(経済イデオロギーに対する)反作用はまた、それまでの経済理論が表立って軽視してきたというわけではないにしろ、どちらかといえばあまり重きを置かなかった事柄を強調したのでありますが、ここではそのうちのふたつのもについて述べておきたいと思うのであります。なかでも特に顕著なものは

宗教であります。みなさまは、マルクスが「宗教は民衆の阿片である」という定式化を行ったことを思い起すでしょう。かれはまさしく宗教をまったくネガティブなものとしていたのであります。そして、既存の共産主義体制をみても、おおむねそれは無神論的であります。ヴェーバーもデュルケムもこれには賛成しませんでした。かれらは、宗教が人間の経験や組織化の特に重要な側面であると考えていましたし、それが実際の日常生活で人間の志向を支えているものだとみていたわけでありまして。もっとも、かれらの行った仕事はきわめて相異なるものであります。デュルケムは、既に述べましたように、原始社会の宗教について詳しい研究を行いましたし、ヴェーバーは、いわゆる世界宗教の経済倫理についてきわめて包括的な比較研究を行いました。しかし、かれらは共に宗教の重要性、および他の社会生活の諸側面を理解することの重要性について深い関心を共有していたのであります。

社会、なかんずく現代社会のきわめて顕著な経済的側面と境を接するもうひとつの領域で、これらふたりの先覚者が充分には分析しなかつたけれどもますます重要なるものであるということが明らかになったものに、家族、親族およびそれが個人のパーソナリティの形成と発展に対して持っている関係、という問題領域があります。もちろん、この点で重要な関連にある学問は文化人類学、特にフランスのそれでありまして。これは、人類学の盛んなイギリスへの重要なコミュニケーションの橋渡しともなってきたものであります。ひとり名前をあげるといたしますと、マルセル・モース (Marcel Mauss, 1872-1950) であります。かれは有名なエッセイ『贈与論』⁶⁾の著者であり、デュルケムの甥でもあります。モースは、デュルケムの存命中にはそのサークルに親しく参加しておりましたし、かれの没後はフランスにおける人類学でこの種の問題に関する最も重要なスポークスマンでありました。(私がたびたび言及しました) ルイ・デュモンはかれの弟子だったのであります。

私の考えでは、社会学が展開してまいりました

6) Marcel Mauss, 'Essai sur le don', *Sociologie et Anthropologie*, P. U. F., 1950, 2^{ème} partie, pp. 145-279. (山口俊夫, 伊藤昌司, 有地享共訳, 『社会学と人類学』 I, 弘文堂, 1973年, 219-397頁)

この現象領域との関連でもっとも重要なものは精神分析学の運動であり、もちろんフロイド (Sigmund Freud, 1856-1939) の仕事がこれとの関連で重要でありますけれども、最近とみにその重要性を増してきましたものに、認知的側面にいっそうの関心を示してまいりましたスイスの心理学者ジャン・ピアジェ (Jean Piaget, 1896-) の仕事がございます。しかし、子供の発達とその社会的規律への統合という領域は、この点でもっとも重要な境界でありましょう。

デュルケムとヴェーバーの没後すぐの時期に、私はこのような展開のひとつの中心となった場所に学生として滞在できたことを非常に幸運なことであったと思っております。それはドイツのハイデルベルグでのことでありました。私はヴェーバーの没後にそこにまいりましたから、かれに個人的に会うということはありませんでしたが、そこはヴェーバーが生産的な人生の大部分を過した場所でしたから、その影響は非常に支配的と申すべきでありました。当時はこの巨人たちの死後で第一次大戦の終結に伴うある種のけじめの時期、すなわち騒々しい時代でありましたが、過去の所産を評定するためには充分時期が熟していると思われました。私は、それを実行するのにまさに幸運な立場にあったと思うのですが、それというのも、私は経済の問題に関わってきていたからであります。私の『社会的行為の構造』⁷⁾では、アルフレッド・マーシャル (Alfred Marshall, 1842-1924) とパレート (Vilfredo Pareto, 1848-1923) に割いた部分は主として経済学を新しく観念された社会学へと繋ぐ橋の役割を果しているわけですが、もちろんこの書物の中心的部分はデュルケムとヴェーバーに関する議論であります。ヴェーバーの影響をもろに受けながら、私はまた必然的にデュルケムに導かれてゆくことになります。もっとも、私はフランスで勉強したことがありませんでしたので、デュルケムは本を読んで学んだということでありまして、まちがっていることも多かろうと心配です。

さて、社会学はその後大西洋を越えて合衆国へ渡ることになります。その初期の発展にはさまざま

異なる側面があるのですけれども、最初の重要な「結晶化」は1920年代、1930年代にシカゴ大学で起ったのであります。もっとも、そこには、これ以前にアルビン・スモール (Albion W. Small, 1854-1926) の下になんにかの先覚者たちがいたわけでありまして。しかし、シカゴ学派で重要な人物ということになれば、W. I. トマス (William I. Thomas, 1863-1947), R. A. パーク (Robert E. Park, 1864-1944), E. バージェス (Ernest W. Burgess, 1886-1966), それに G. H. ミード (George H. Mead, 1863-1931) でありましょう。ミードは本来哲学者でありましたが社会学者達に絶大な影響を与えました。このシカゴ学派の発展の背後できわめて重要な役割を果したのはヨーロッパの影響でありました。シカゴという大都市を社会学の実験室として利用したのは、ヨーロッパの影響ではありません。これは主として、新聞記者として何年間かの経験をもっていたパークがそこから惹き出したアイディアであったと思います。しかし、パークもトマスもドイツに留学しておりますし、スモールはジンメル (Georg Simmel, 1858-1918) と繋がっております。そして、かれらはみなドイツの知的環境の中でヴェーバーのサークルに結びついていたのであります。ストラスブルグ大学におけるパークの師は、当時ドイツ哲学における新カント主義運動の指導者のひとりであった哲学者のヴィンデルバンド (Wilhelm Windelband, 1848-1915) でありました。そして、私がここで述べておきたいことは、ヴェーバーとデュルケムとが共にカント哲学の影響下にあったという点であります。かれらは、過激な経験主義にも観念論あるいは歴史主義にも傾き過ぎることがなく、健全な平衡感覚を維持し続けたのであります。

アメリカでは、シカゴ学派の発展に続いてほしい第二次大戦直後から、社会学のもっとも重要な理論的展開はハーバード大学を中心として展開するようになるわけですが、これがしばしば構造-機能主義と呼ばれるものであります。もっとも私はこの名称をあまり好んでおりませんが、(ひとびとがそう呼ぶのですから) どうしようもございません。私としましてはむしろマートン (Robert

7) T. Parsons, *The Structure of Social Action*, McGraw Hill ed., 1937, The Free Press ed., 1949. (稲上毅, 厚東洋輔訳, 『社会的行為の構造』, 木鐸社, 1974年-全5分冊)

K. Merton, 1910-) の用法である機能分析という言葉を使いたいと思うのです。とにかく、この学派は私が述べてまいりましたデュルケムとヴェーバーの伝統を総合したものであり、また同時に経済学が扱ってきた諸問題をもとり入れるものでありました。ただ個人的に申させていただきますなら、私としましては昨今経済学と社会学とが相互に離ればなれになってゆく傾向を深く憂慮するものであります。ところで、かつてハーバード大学で私の弟子でありました学説史家の E. ティリアキヤン (Edward A. Tiryakian, 1929-) が述べているのですが、かつてはシカゴ学派が隆盛をきわめ、次いでハーバード学派が台頭するという歴史的な経過を経て、現在、特に1960年代末の大学紛争との関連でいくつかの反対勢力がこのハーバード学派に反旗をひるがえすという状況が現われてまいりました。しかし、一時期、合衆国における重要な社会学の講座はシカゴ大学で訓練されたひとたちによって占拠され、現在ではそれがハーバード大学のひとびとによってとって替えられていると申してよいわけで、この後者の一番打者は現在コロンビア大学におります R. K. マートンであります。

そこで、現在理論社会学がいかなる状況に立ちいたっているかという点について一言申しあげてみたいと存じます。もちろん断るまでもありませんが、これは私の個人的な解釈でありまして、アメリカあるいはそれ以外の国の社会学者の同意をえられるかどうかは分かりません。しかし、とにかく、ほぼ10年位前から社会学の危機（それが本当の危機であるのかどうか、私としては疑問ですが）が叫ばれてきたように思うのです。A. グールドナー (Alvin W. Gouldner, 1920-) がこの危機という言葉を使ったタイトルの書物を発表いたしました。それは『せまりくる西欧社会学の危機』⁸⁾ という本でありまして、まさに字義通りの意味で解釈されているようであります。私が思いますに、われわれがヴェーバー＝デュルケムの伝統と呼んだものが（理論社会学の）主流にあるという解釈は、歴史の経過に照して確認されていると考えます。その知的遺産の中心性に対して真に決定的な

挑戦が現われたとは考えられません。ところで、私にとっても英語で適切な言葉を探しあぐねているわけですが、三つの主要な別の考え方の流れについて語るができると思うのです。もっともこれらは、中心的な伝統から逸脱しているものというよりは若干考えを異にするものと考えた方がよいようにも思います。その第一のものは、ネオ・マルキシズムの新たな台頭であります。これは重要でありますけれども、例えば1930年代のマルクス主義的な運動とは非常に異っております。少なくとも、最近の主要な社会学者たちはマルクスの経済理論、すなわち剰余価値の理論や労働価値説などにはたいした興味をもっておりません。かれらは、なかんずく階級闘争の理論、それと国際的なレベルにおける帝国主義に関心をもっております。これらふたつが昨今のかれらの第一義的な関心であります。この流れに属するひとびととしては、最近大著を出版したウォーラーシュタイン (Emmanuel Wallerstein) (そのタイトルを正確には憶えておりませんが) や先の国際社会学会会長であった英国人の T. ボットモア (Thomas B. Bottomore, 1920-) がおります。

私がネオ・マルキシズム流の考え方を受け入れないのは、それが現代社会の複雑な諸問題に対して適切な経験的対応を行わず、その理論を充分分化させてゆく努力をしない点にあります。たとえば、社会階層ひとつをとりあげてみましても、かれらは相変わらず抑圧者と被抑圧者の二元論的關係を語り続け、あたかもこれ以外の分化が重要でないかのような姿勢をとっております。このことは社会成層以外の他の領域についてもいえることであろうと思うのですが、ここではこれ以上に言及することはできません。時間も残り少なくなりましたので、他のふたつの流れについて若干のことを申しあげておきたいと思えます。第2の流れはネオ・ポジティヴィズム (新実証主義) と呼ぶかと思えますが、これにはふたつの支流がございます。そのひとつは、比較的理論的な経験主義であり、それは統計的な明証性・簡潔性・一般化をその理想としております。これももちろん社会学の中で長い歴史をもつものであり、例えば、

8) Alvin W. Gouldner, *The Coming Crisis of Western Sociology*, Basic Books, Inc, 1970. (岡田直之, 田中義久ほか訳, 『社会学の再生を求めて』, 全3巻, 新曜社, 1974-75年)

コロンビア大学の社会学の創始者であるギディングス (Franklin H. Giddings, 1855-1931) に始まり、同じくコロンビア大学で訓練を受けたオグバーン (William F. Ogburn, 1866-1959), それに決して純粋に非理論的ではないにしろこの種の考え方を強調するラザスフェルト (Paul F. Lazarsfeld, 1901-1976) やスタウファー (Samuel A. Stouffer, 1900-60) をこのリストにつけ加えることができると思うのです。現在、この流れでもっとも卓越した人物としては O. D. ダンカン (Otis D. Duncan, 1921-) がありますが、かれはシカゴ大学で訓練を受けました。さて、新実証主義のもうひとつの流れはより行動主義的な心理学的な還元主義の系列であります。社会学では、この流れを一番よく代表しているのは G. ホーマンズ (George C. Homans, 1910-) であります。かれはよく知られているように、さまざまな機会に「社会学は応用心理学とみなされるべきである」と申しております。そして、かれの学問上の師は B. F. スキナー (Burrhus F. Skinner, 1904-) であります。スキナーは人間の替りに鳩を使って経験的研究を行ったいわば「鳩行動主義者」でありました。もっともかれは、理想的、ユートピア的社会に関する『第二のウォールデン』⁹⁾ (Walden Two) という本もあらわしてはいます。

さて、時間もなくなったようですが、最後にもう一言つけ加えておきたいと思えます。三番目の流れは、大雑把に現象学的運動と呼んでおけばよいと思うのですが、これはいうまでもなくその源流をドイツ哲学、なによりもその出自をきわめてヘーゲル的な (と私は考えるのですが) 哲学の流れの中にもっているのです。丁度、私がドイツで学生時代を過ぎていた時期は、この考え方の最盛期であったわけですが、しかし未だ社会学の学派としては存在していませんでした。この学派でもっとも重要な人物をひとりあげるとすれば、それは A. シュッツ (Alfred Schütz, 1899-1959), であります。かれはドイツ人ではなくオーストリア人でしたが、ナチがこの地に侵入してきた時に亡命致しました。かれこそはこの運動

の文化的英雄であり、今日これはエスノメソドロジーとして一学派を構成することに至っております。その重要な指導者は、これまたハーバード大学で私の弟子でありました H. ガーフィンケル (Harold Garfinkel, 1917-) であります。この学派もさまざまな傾向を含んでおりますが、大切な点はこれが日常生活の研究に強い関心を示しているということであります。その (社会学理論に対する) 専門的な含意については、残念ながらここで述べる余裕がございません。もうひとつ、現象学的な流れが存在しますが、そのもっとも代表的な人物は P. バーガー (Peter L. Berger, 1929-) であります。かれはマクロ社会学のレベルでも論文を書き、特に宗教をこの観点から扱っております。最後に、最近の理論社会学には、アイゼンシュタット (Shmuel N. Eisenstadt, 1913-) が近著¹⁰⁾で指摘しているように「多元化」の傾向があるということです。そこには、本日の講演のような粗雑なやり方ではとうてい言及し盡くせないいろいろな事柄が進行中であります。数学的なモデル作り、ネットワーク理論など数えあげれば際限のない長いリストを用意しなければならないでしょう。それらはきわめてゆるやかにしか統合されておられません。しかしながら、そこには決定的に重要な理論の発展の流れがあると思うのです。そして、私のようにかなり長い間社会学者として生きてまいりましたものの目からみれば、過去約50年の間に理論の発展、概念化の洗練、理論の統合、理論の経験的研究への応用などさまざまな点で、社会学は大きな前向きの変化をなし遂げたと申しあげることができるように思えます。そして、この社会学の前進はもちろん私の個人的な記憶の中で生々と生き続けているのであります。

御清聴、有難うございました。

9) Burrhus, F. Skinner, *Walden Two*, Macmillan, 1948. (宇津木保, 宇津木ただし訳, 『心理学的ユートピア』, 誠信書房, 1969年)

10) S. N. Eisenstadt with M. Cuvelaru, *The Form of Sociology—Paradigms and Crisis*, John Wiley & Sons, Inc., 1976.